さんだいじ

(姶良郡加治木町日木山字三代寺)

位置と環境

三代寺遺跡は,加治木町のシンボル「蔵王嶽」の 南麓,標高約40mの傾斜面に位置している。ここ は,網掛川や別府川によって形成された沖積平野を 一望できる好位置で,谷を挟んで西側には,中世の 山城「加治木城」があり,また,眼下には日木山川 がながれ,平成4年に調査された千迫遺跡が所在す る。

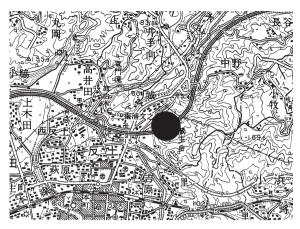
調査の経緯

九州縦貫自動車道の建設に伴って、県教育委員会が昭和49年3月に確認調査を行い、引き続き4月から7月まで本調査を実施した。

遺物と遺構

調査では,縄文時代(早期・前期・晩期),古墳時代,中世の遺物や遺構が確認されたが,地形が傾斜地のため,開墾などによる削平を受け,必ずしも良好な残在状況ではない。

中世では300以上の柱穴群が検出され、遺跡名に 由来する加治木肝付氏の菩提寺「三諦寺」の存在を うかがわせる。この時期の遺物としては、福建省産 白磁や竜泉窯系の青磁があり、国内産の瓦質陶器や 土師器、若干の備前焼が出土している。

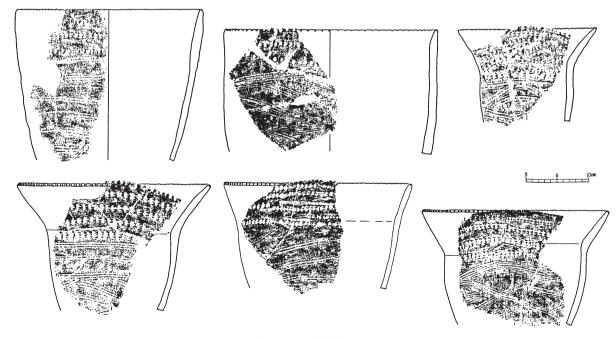


第1図 三代寺遺跡の位置

古墳時代の遺構は確認されていない。なお、須恵 器や丹塗り高坏、貼付突帯のある成川式土器が少量 出土してる。

縄文時代の遺構としては、早期後半と思われる集石が5基、比較的等間隔に検出されている。土器は、晩期の資料が少量出土しているが、この遺跡の主体となるのは早期の資料である。特に、報告書の中で塞ノ神B式として分類された一群は、後に「三代寺式土器」と呼ばれるようになった(第2図)。

このほか、口縁部が若干内湾気味に傾く円筒形の 器形で、外面にクシ状の施文具で羽状や流水状に沈 線文が施された桑ノ丸式土器(第3図)や、在地系 円筒土器である吉田式土器・前平式土器(第4図)、 及び伝播系土器で押型文のある手向山式土器が出土

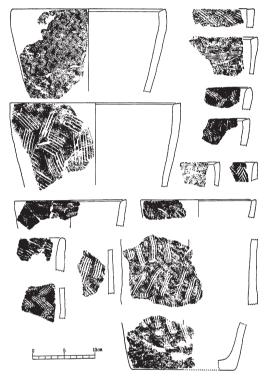


第2図 三代寺式土器

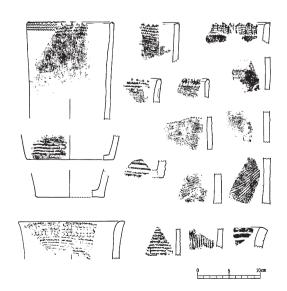
している (第5図)。

石器は石鏃、石匙、石斧、叩石、磨石、凹石、石 皿と多量の剝片石器が出土している。石鏃は、凹基 無茎式と平基無茎式があり、全体の統一性がない。 石材としては、大分県の姫島産の黒耀石に類似した ものがある。

石匙は縦型と横型があり、石斧は、局部磨製、磨 製、礫器状がある。磨石は、角状の扁平形で、形状



第3図 桑ノ丸式土器



第4図 貝殼文円筒形土器

が良好調整されている。剥片石器は、同一包含層から黒耀石の原石・剥片・砕片が多量に見られることから、剝片石器の一つの形態が想定される。

特徴

三代寺式土器の器形は、「く」字形のラッパ状口縁部と円筒形胴部、安定した平底で構成されるが、口縁部がゆるやかに外反する器形や外反せず円筒形の口縁部を持つ器形もある。文様は、口縁部付近に貝殻連続刺突文を横位・山形に施文し、胴部には、状線文帯を横位・縦位・幾何学状に施すものである。

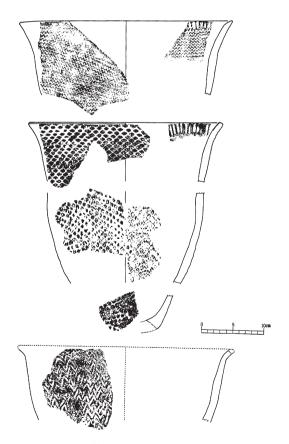
資料の所在

出土遺物は,鹿児島県立埋蔵文化財センターに一 括保管されている。

参考文献

鹿児島県教育委員会1979「三代寺遺跡・木佐貫原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』11

(関 一之)



第5図 押型文土器